

日本の絵本・歴史的考察IV

占領下の翻訳絵本 / ウェズレー・デニス作『フリップ物語』の場合

石川 晴子

(四条畷女子短期大学)

I. はじめに

1953年に岩波書店から『岩波の子どもの本』シリーズが出版された。『ちびくろさんぼ』をはじめとする翻訳絵本が、その後の日本の絵本に与えた影響についてはよく知られている。しかし、それ以前の1945年から52年の連合軍占領の時期に出版された外国の翻訳絵本については、言及されることが少なかった。敗戦後しばらくを経て、雑誌をふくめて非常に多くの児童書が出版されたが翻訳書は数が限られていた。当時、翻訳の児童書は従来から知られていた『宝島』などのほかは、ほとんど世に知られないいわば特異な本であったと思われる。アメリカの絵本を翻訳した『フリップ物語』は、そのなかでも特異な存在ではなかろうか。本論では、この『フリップ物語』がどのようなものであったかを考察し、わが国におけるある時期の翻訳絵本や子どもの本に対する考え方を探り、歴史の空白を埋める一助としたい。

II. 『フリップ物語』

『フリップ物語』の体裁や出版社、出版年などは以下のようなものである。

画と文： ウェズレー・デニス
 訳と註： 櫻沢如一（ジオルジュ・オーサワ）
 出版社： コンパ出版社（東京）
 出版年： 昭和24年4月1日
 定価： ￥150 頁数： 60頁
 体裁： 大きさ： 17.5㎝(横) × 24㎝(縦)
 表紙： 厚紙 全体が茶色で楕円形の白地に黒で子馬の頭部を描く
 挿し紙： 文字、絵ともに白地に黒色
 文を上英語文を下に並列させる

本書は次の本の翻訳である。

Title: *FLIP*

Text and illustration: Wesley DENNIS

Publisher: The Viking Press

Copyright: 1941

同時期に出版された翻訳絵本には、『たくさんのお月さま』や『かもさんおとおり』など現在も翻訳が出版され、また、原書もアメリカにおいて刊行が続いているものがある。しかし、本書は現在では日米いずれにおいても出版されていない。作者のW. デニスは、

馬の絵を描かせたら並ぶものがないといわれ、主として1940年代に活躍していた。多くの絵本や挿絵が広く知られており、『フリップ物語』もベスト・セラーであったようである。

このデニス作『フリップ物語』の原書は、本論執筆時に日本での所在の有無が不明であるため、やむなく翻訳された本のみによって論じなければならない。しかし、占領下の日本では出版物はすべて進駐していた連合軍最高司令部（SCAP）によって検閲されることが原則であったことと、そのために現在残っているいくつかの翻訳絵本がいずれも文と絵ともに原書を忠実に再現しようとしているところから、本書も頁数、大きさをふくめて、形態と、絵およびテキストの内容と配置、画面構成などには、原書と大きな違いはないものと考えられる。ただし、日本語版にある巻頭の「みるまえに」と巻末にある「みたあとで」と「父兄の方々に」は原書になかったものであろう。また、各見開き画面の左頁上方には画面の数を示す番号が振ってあるが、これも日本語版のみであろう。

全体の構成は見開きを一画面として、29画面で構成されている。画面12には両頁いっばいに農場の草地とその向こうにある木立が描かれ、短い文が左の上方に配置されている。この画面を唯一の例外として28画面の構成はすべて右頁に絵を、左頁には白い空間に文が配置してある。

本書の一見して明らかな特徴は、原書に日本語を書き加えたように見えることである。英語のテキストが各左頁の下方に置かれているが、この例は他の絵本にも見られるので、原書はこのような様式であったのではないかと思われる。日本語のテキストは左頁の上方に置かれている。

翻訳は、他の数冊の翻訳絵本もそうであったように原文の意味をはば忠実に伝えようとしている。ただ、原文にはない「ポチャーン」や「グーグーグー」といった擬態語や擬音語が多用されている。英語と比較して日本語では擬態語、擬音語がよく用いられ、特に読者が幼い子どもの場合には用いられることが多い。しかし、それを割り引いても、他の翻訳と比較すると多い。また多少誇張された表現や感嘆詞が散見し、全体に少し感情的な調子になっている。表記法にも特徴が

あり平仮名に漢字と片仮名が混じっている。この独特な日本語と表記法は、この訳者に特有な手法といつてよいのではないか。

翻訳者は、櫻沢如一である。ジオルジュともジャンG・オサワとも書くことがあるが、これは彼が独自の思想に基づいて自らを称した名前であると思われる。この時期にアメリカの絵本を翻訳した人については、光吉夏弥の他は、現在のところ未だ明らかにしていないが、この訳者についても彼自身が書いていること以上には知り得ていない。

Ⅲ. 『フリップ物語一解説一』

『フリップ物語』が特異であるもう一つの理由はこの絵本より大幅に量の多い解説書が同時に出版されていることである。

書名： フリップ物語 一解説一
著者： 櫻沢如一（ジャンG・オサワ）
発行所： コンパ出版社
発行年： 昭和24年4月1日
定価： ￥70 頁数： 102頁
体裁： 大きさ： 11.5a(縦) × 17.5a(横)
表紙： 絵本と同じ絵
本文： 縦書き 白地に黒インキ
絵本からの縮刷版の挿絵入り

この解説書は、絵本『フリップ物語』（以下では「絵本」とする）の各画面を順序を追って、作者が描こうとしたと著者が解釈することを詳しく述べたものである。「絵本」の巻頭で著者は読者に向かって『デニスわ全くリクツぬきで、デモクラシイのココロをエモノガタリにしてくれました。（…）この本を見て君わナニをつかみでしょう？よみおわたらよく考えて下さい。（…）』（みはな）と語りかけている。そして巻末でこの絵本を如何に読むべきか、何を読み取るべきかを熟っぽく述べる。著者にとって、この絵本に描かれていると考えることを読者が理解するためには「絵本」だけでは十分ではないと思われた。さらにいうならば、著者は、かねてから普及に努め、そのため政府から弾圧された実践的人生哲学（「実用弁証法」p.86）をわかりやすく表現したものとしてこの絵本をとらえ、解説という形を借りて自分の思想とその実践法を説こうとしたのである。

Ⅳ. 考察

『フリップ物語』はアメリカのケンタッキーの農場で生まれた子馬が、母馬のように川を飛び越えたいと願いひとりて練習を重ねて跳べるようになるまでを描いている。この絵本の魅力は、馬の美しい姿が見事に

イメージ化されていることに加えて、夢の中で銀色の翼がはえて自由に空を飛びまわる解放感と自分で川を跳んだという達成感が素直に共有できることであろう。訳者は、ここに自由と自助と困難に挑戦する精神を読み取り、それがフロンティア魂でありアメリカ精神の真髄であると説く。そしてその精神を支えるのが健康であり、健康であるための食事法と簡単な「ヨーギ」修行（おそらくヨーガのことであろう）の必要性を力説する。彼は自説を広めるために三十年以上にわたってインドやフランスなど世界の各地を旅してまわり、外国から見た日本の国家としての将来の危うさを痛感していたので、多くの本を書くだけでなく、おそらくは組織的な運動をしたのであろう。そのために国家に対する危険人物として投獄され拷問を受けたと「解説」のなかで書いている。日本の敗戦によって自由を得た彼にとってアメリカは実質的な解放者であり、個人の自由を尊ぶデモクラシイの精神を実現した国であった。生きていることの喜びと自由の重要さを語り、それを我が物とするためには飛躍することが必要であると説く彼のことは力はこもっている。この飛躍を子馬のフリップが川を「ジャンプ」することに象徴させて幼い人にも理解してほしいとの思いがこの絵本の翻訳と解説を書いた動機であろう。

この訳者にとって、新しい自由な世界へはばたいていく手段のひとつとして外国語の知識は重要であったと思われる。英語は日本の子どもが挑戦すべき最初のもののひとつとしてあげられている。『フリップ物語』のような簡単なことばで本質的なことを語り絵の力を借りて幼い人に大切なことを理解させる絵本が英語だけでなく、外国語を身につけるにも有効であることを櫻沢は心得ていたのである。

『フリップ物語』は「解説」のはじめに書かれているところによると、GHQによって日本版を出すことを許可されている。GHQの機関のひとつであった CI&E（民間情報教育局）の目的は日本の非軍事化と民主化であった。その目的のために選ばれた絵本がこの『フリップ物語』であり、櫻沢はその訳者として相応しい人物であったのである。

いくつかの点から、出版当時の日本では特異な絵本であり、ほとんど注目されなかった『フリップ物語』だが、現在から見るとそれほど特異であるとは思えない。50年の歴史が日本に大きな変化をもたらしたのであろうか。この絵本が突きつける問題は小さくないと思われる。